

分布図情報



「世界図」

メルラ作 17世紀 32.0×52.0cm 銅版手彩色

(収蔵資料展示「古地図の世界—外国図—」より)

(山下和正氏蔵)

16、17世紀の地理観をよく表している世界図です。東西半球に広く緑色で描かれている「MAGALLANICA」がそれです。

ギリシャ人は、地中海からアジアにまたがる北半球に対して、南半球にも広大な大陸があると想像していました。特に、1521年にマゼランがマゼラン海峡を通過したとき、この海峡の南にあったフェゴ島を南方大陸の一角をなす地域と考えて、彼の名に因んで「Magallanica」と命名されました。

東半球の北東（右上）に日本が描かれていますが、当時の日本のもう一つの形として知られていた「エビ型日本図」も図の右上端に描かれています。西半球の大半に南北アメリカが広がっていますが、コロンブスがアメリカ大陸を発見したのが15世紀末（1492年）ですので、わずか百数十年の間にこれだけの地図が描かれるようになったことにより、その当時の地理的関心の強さをうかがうことができます。



日本一の地

『世界分布図センター』『情報工房』の

図の図書館

平成15年度催し物のご案内

平成15年2月15日、世界分布図センター入館者が100万人を超えました。

世界分布図センターが平成7年7月7日に開館して以来、多数の方々にご利用いただいた結果であり感謝申し上げます。『世界分布図センター』『情報工房』は、利用者の多様なご要望にお応えするため、現在13万点を超える地図・分布図、地図関係図書を備え、日本一の地図の図書館となっています。学術的調査・研究だけでなく、旅行時の調べものの際に、県内外の多くの皆様に、幅広い目的でご利用いただいております。

今年度も、当センターや工房をより深くご理解いただき、地図・分布図に関心のある皆様のご要望にお応えするために、様々な催し物や事業を展開します。

(1) 収蔵資料の展示

『世界分布図センター』が収蔵している地図や分布図などを期間毎にテーマを設け、世界分布図センター内に展示します。

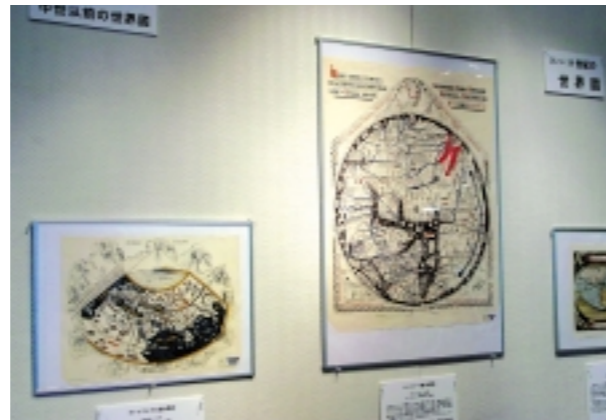
・『古地図の世界 - 外国図 -』

【4月2日～5月1日】

古地図からは、その時代の歴史や人々の地理観など製作された時代の情報を読みとることができます。

ヨーロッパの古地図は機能性ばかりでなく、デザイン的にも美しく、現在のカレンダーやインテリアの一部としても利用されています。

今回の展示では、16～19世紀の世界とアジア・ヨーロッパ・アフリカなど各地の地図や現代の世界地図(中心がどこにあるかによって不思議な世界を感じることができます)を取り上げて展示しました。



展示の様子

・『地図の目的と表現』

【6月4日～7月30日】《現在開催中》

地図はその目的に応じて、一般図と主題図に大別されます。特に主題図は、その内容により同一地域でもその表現方法が大きく異なっています。この展示では、同一地域を描いた各種の主題図を展示し、その目的や表現方法の違いを紹介しています。

以降の館内展示につきましては、下記の内容を予定しています。

『地図で見る都市の変遷』

【9月3日～10月30日】

『古地図の世界 鳥瞰図』

【2月4日～2月29日】

また、岐阜県図書館より遠方の方々にも世界分布図センターの収蔵資料をご覧いただくために、県内の図書館・公民館や岐阜県博物館などで館外展示を実施します。詳細につきましては、後ページの「館外展示の紹介」をご覧ください。

(2) 夏休みわくわく地図教室

【7月24日、7月25日】

地図や分布図に関心のある小・中学生を対象に、コンピュータを使った地図作りが

体験できる「夏休みわくわく地図教室」を開催します。教室は、小学校低学年の部(7月24日)と、小学校中・高学年及び中学生の部(7月25日)に分けて、児童・生徒の皆さんの学習段階に応じた内容で行います。また、今年度も地図教育を研究する渡辺一夫さんをお招きし、地図の読み方や作り方などについてのお話をさせていただく予定です。(参加には事前にお申し込みが必要ですが、今年度の募集は7月7日(日)で締め切らせていただきました。たくさんのご応募ありがとうございました。)



夏休みわくわく地図教室(平成14年度)

(3) 第9回児童生徒地図作品展

【11月1日～12月27日】

岐阜県内の小学校・中学校・高等学校・特殊教育諸学校に在籍する児童生徒を対象に分布図、生活科マップ、立体模型地図などの地図作品を募集し、応募作品の中から優秀作品を選んで展示します。

授業で学んだことを発展させたり、身のまわりで興味を持ったことをきっかけにして、

自分らしい発想の分布図や地図を作成し、所属学校を通して出品してください。

詳細については、世界分布図センターのホームページか各学校に配布した募集要項をご覧ください。(作品の大きさの規格を守ってください。規格外の作品は受付できませんので、ご注意ください。)



第8回児童生徒地図作品展
岐阜県知事賞「池田ものしりマップ」
(池田町立温知小学校3年 荒川 菜)

(4) その他

世界分布図センターでは、常設展示として、人工衛星NOAAのデータを解析し作成した環境画像を掲示する「リモートセンシングコーナー」や、国土交通省国土地理院が作成した地図や画像を展示し、国土地理院の活動を紹介する「国土地理院コーナー」を設けています。

また、岐阜県図書館では、文化講演会、映画会など数多くの行事を年間を通じて計画しています。多数の方のご来館、各種行事へのご参加をお待ちしております。

(館外展示の紹介)

展示場所	内容	期間
瑞浪市民図書館	「地図で見る東海自然歩道」	6月10日～6月29日
養老町中央公民館	「地図のいろいろ」	7月11日～7月21日
可児市立図書館	「地図で見る東海自然歩道」	8月6日～8月17日
岐阜県博物館	「古地図世界～国絵図～」	10月11日～11月9日
郡上八幡総合文化センター図書館	「絵図と近代地図」	1月15日～1月27日
アクティブG(岐阜駅)	「古地図の世界～鳥瞰図～」	2月28日～3月12日

平成14年度

リモートセンシング研究委託事業の成果について

1 平成14年度の委託事業について

岐阜県図書館が「情報のふれあい広場」として新しく開館したのは、平成7年7月7日です。この図書館の中に、単に岐阜県に留まることなく日本、世界の地図・分布図を収集整備する「世界分布図センター」、豊富な資料と分布図情報システムを駆使して様々な地図を作成できる「情報工房」が設置されました。



図1 開館当時の県図書館

開館当時、「世界分布図センター」は、社団法人日本写真測量学会への委託事業として、衛星画像を利用した県内の環境調査をしておりました。その後、範囲を広げ日本、アジア、世界の環境についての研究委託を続けてきましたが、平成14年度は原点に戻り岐阜県の研究をいたしました。

2 ランドサット衛星による画像

LANDSAT衛星からの観測による画像で、岐阜県に雲がかかってないものは意外にありません。これまで所蔵していた岐阜県衛星画像の中で、雲が殆どなく最も美しいものは、1987年11月11日の画像でしたが、平成14年度の委託事業によって新しく、2001年11月25日の画像を手に入れました。

情報工房にあるGISソフトを利用して、この画像に緯度経度の位置情報を持たせ、地図の背景として利用することが可能です。

情報工房の機器を利用して、ランドサット画像の上に平成15年6月現在の岐阜県96市町村界を重ねてみました。山県市、瑞穂市は薄く塗りつぶしてあります。(下図参照)

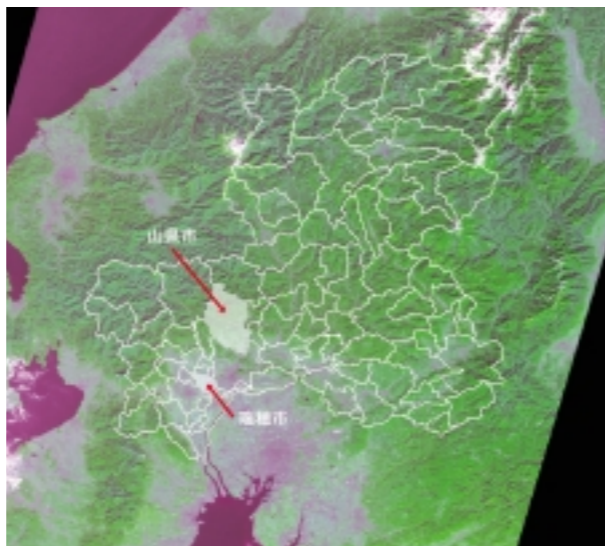
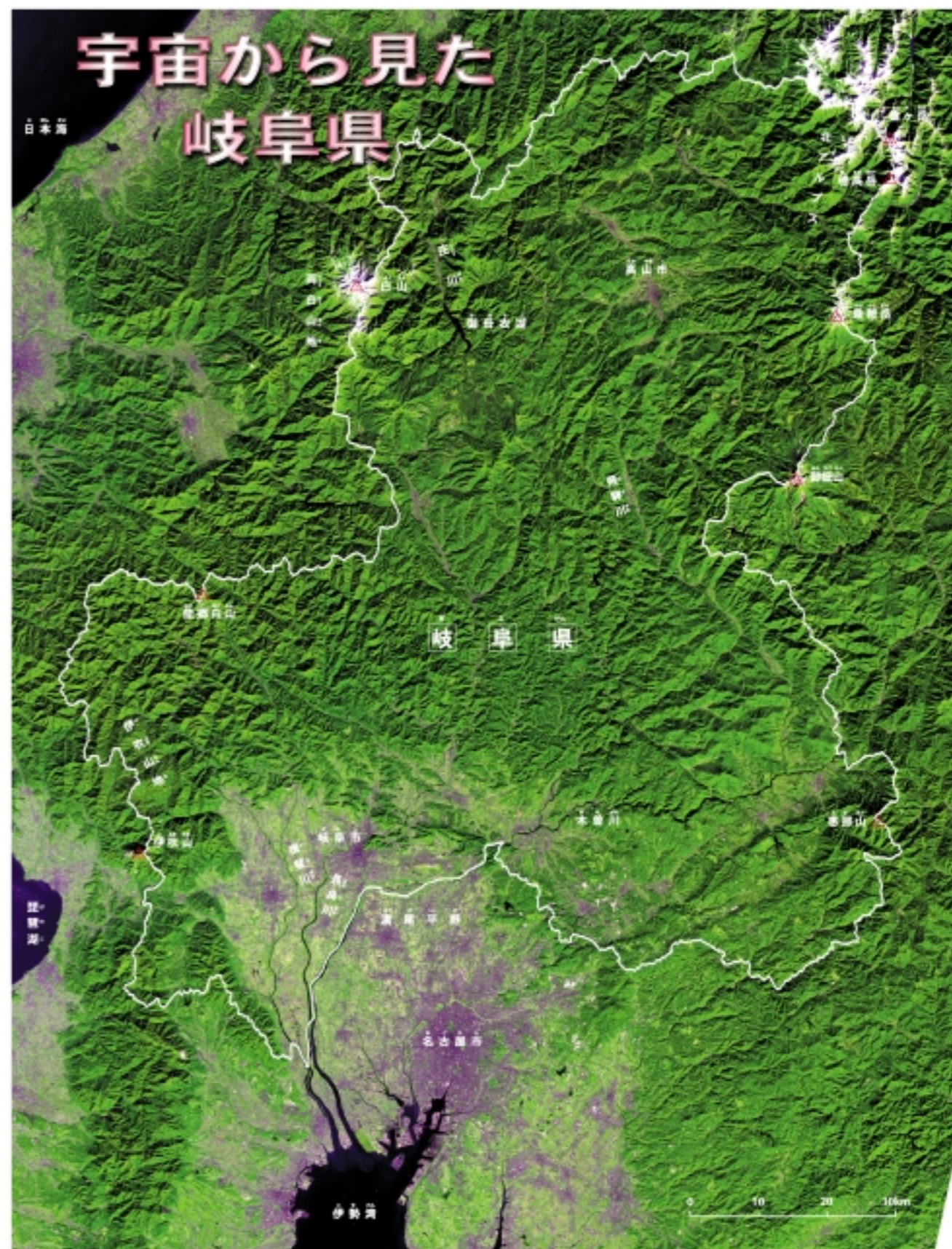


図2 ランドサット画像と市町村界

3 小中高等学校の授業で利用

インパクトのあるランドサット画像を学校教育に一層役立てていただけるように、「宇宙から見た岐阜県」とタイトルをつけた学習教材を県下の小中高等学校に配布しました。授業に使っていただいた学校からメールをいただきましたので、その一部を紹介します。

- ・小学校4年の社会「私たちの県」で岐阜県の形をとらえるための資料として利用しました。(関市・小学校)
 - ・中学校1年理科「大地の変化」で利用しました。岐阜県の活断層の様子がよく分かりました。(飛騨地区・中学校)
 - ・高校2年次の地学Aの授業で岐阜県の断層、火山の位置を確認する資料として利用しました。(岐阜市・高等学校)
- 他にも多数のメールをありがとうございました。



この衛星画像は2001年11月25日に米国のランドサット衛星(Landsat-7号)により観測したデータから作成しました。この衛星の観測装置ETMは7つの波長帯(バンド)で観測していますが、そのうちのバンド2を青、バンド3を赤、バンド4を緑に割り当て、コンピュータで作成したものです。

緑	森林
黄緑	農地/草地
紫	市街地
黄	裸地
白	水域
黒	雲

岐阜県図書館世界分布図センター

図3 学習教材「宇宙から見た岐阜県」

古地図の世界－外国図－

平成15年4月2日(水)～6月1日(日)

地図の歴史は文字よりも古いといわれ、古地図からは、その時代の歴史や人々の地理観など、製作された時代の情報を読み取ることができます。また、新旧の古地図を比較することにより、人々の地理的視野の広がりや土地への認識、表現や製作方法の進歩なども理解することができます。

ヨーロッパの中世は、キリスト教（聖書）の影響により地図製作についての発達をあまり見ませんでしたが、十字軍の遠征とそれに続くルネサンスを経て、大航海時代に入ると、地理的視野の拡大とともに地理学や地図が大いに発展しました。特に地図は、想像の世界から現実の世界へと人々の目を向けさせてきました。

また、ヨーロッパの古地図は機能性ばかりではなくデザイン的にも美しく、現在もカレンダーやインテリアの一部として利用されることもあります。

今回の展示では、「古地図の世界 - 外国図 -」をテーマに、16から19世紀にかけて製作された古地図の中から、当時の代表的地図製作者であるブラウやオルテリウス、リンスホーテン、メルカトル、ホンディウスなどが製作した世界図や、ヨーロッパ、アフリカなどの大陸図を紹介しました。

これらの古地図から、地理的視野が拡大していく様子や、地図の表現方法やデザイン性の変遷を楽しんでいただけたと思います。

め、かなり正確に記載されていますが、アフリカの南方に広がる大陸については、「Terra incognita」（テラ・インコグニタ 未知の土地）となっています。



プトレマイオス型世界図 作者不詳
1560年頃 31.5×42.5cm 木版一色刷
(山下和正氏蔵)

ローマ時代には科学が大きく発達し、2世紀頃活躍したギリシャのプトレマイオスも地理学や地図の発達に大いに貢献しました。この図は、プトレマイオスが作製されたとする地図をほぼ踏襲して描かれたものです。

2世紀頃のヨーロッパ人に知られていた世界は、現在のほぼ1/4程度であったといわれています。このため、プトレマイオスの世界図も経度で180°（ただし、図上ではおよそヨーロッパからインド東部まで）、南緯20°までの範囲を円錐図法で表現したものです。

ヨーロッパの地名として、「Gelmania」（ゲルマニア現ドイツ）や「Italia」（イタリア）などを読み取ることができます。また、アフリカについては地中海を利用した交易が盛んであった



アジア図 ホンディウス
1606年 48.0×56.0cm 銅版手彩色
(山下和正氏蔵)

この図は、ウィリアム・ブラウのアジア図に先立つものですが、両者を比較するとその精度に大きな開きがあります。特に、朝鮮半島と日本にそれがよく現れています。しかし、西アジアから南アジアについては、交易が盛んであったためか、沿岸部はそれ以前の地図と比べると正確さを増しています。

実用性以外に彩られた地図は、居間やや客間のインテリアとして家庭で利用されていました。

岐阜市の

小学校校区別地図を作成しました

「岐阜県情報工房」では、GISソフトを利用し、様々な地図を作成することが可能です。しかし地図作製のためには元になる資料が必要となります。昨年度、地図作製のための基礎資料として、（財）統計情報研究開発センター提供の「平成12年度国勢調査町丁・字等別（境界）データ岐阜県」を入手しました。このデータについて簡単に説明します。

例えば、県図書館の所在地「宇佐4丁目」ですと、その地図上の形（ポリゴン）と平成12年度国勢調査による「宇佐4丁目」の面積、人口、世帯数等が対応しています。これが岐阜県全ての町丁・字当別に揃っています。

これから岐阜市データだけを切り出して、小学校の校区毎に新しいポリゴンを作成しました。小

学校区ごとの面積や人口のデータを持たせてあるので、人口別の分布図を作成することが可能です。面積で割って人口密度で色分けをすることも可能ですし、背景に地図を重ねることも可能です。（ただし、国土地理院の許可が必要となる場合があります。）

（図1参照）

さらに、ひとつの校区を拡大して背景に道路地図等を重ねればひとつの小学校区の地図ができます。

小学校の授業で、自分たちの町の調べ学習等に利用できるのではないかと考えておりますが背景の地図を重ねるのがなかなか大変な作業です。

（図2参照）

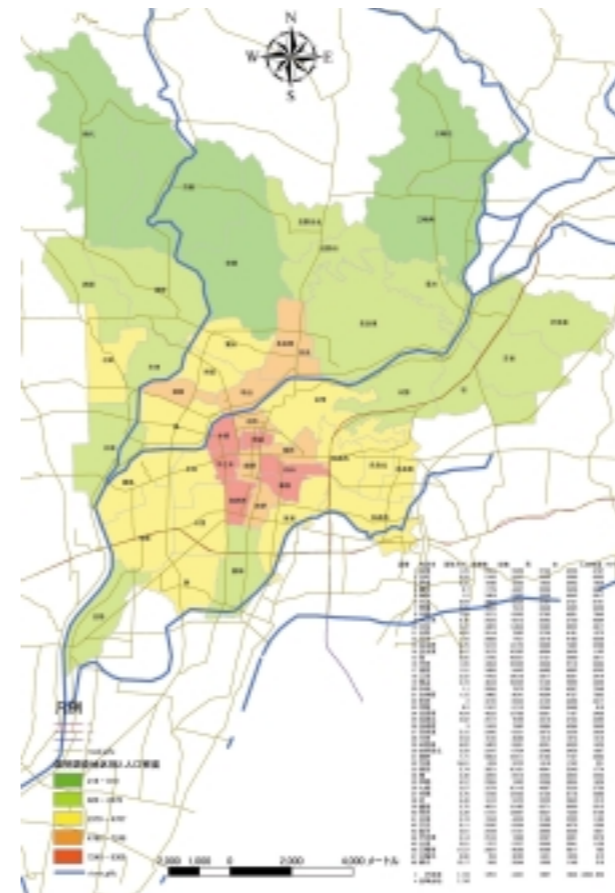


図1 小学校校区別人口密度図



図2 加納小学校校区地図

気候地名の身近な例

地名とは人間の生活地域に対して付けられた名前であり、その地域の特徴を示し、他の地域と明確に区別するものといえます。

例えば、岐阜市十六条のように古代土地制度である条里制を表す地名やなど過去の人間の生活と深い関係のあるものや、土岐市の下石や恵那郡明智町の風のよう急斜面を示す地名や御嵩町の謡坂のような細長く続く谷状になった坂などその地域独自の地形を示す地名もあります。

このように考えると地名を知ればその地域の開発の歴史や自然環境などがわかり、それゆえに地名の意義は考古学・歴史学・地理学的な価値を持つことであるとされます。

中でも気候は地形と並んで住民の生活に直接かわる重要な環境要素であり、地名としてよく引き継がれています。

ここでは気候地名の身近な例をみてみたいと思います。

図1の中で加子母町に近い東白川村北東部の越原地区の上流部では大明神川と合流した白川がそこから1kmほどほぼ東西に流れています。その上流の北側に日向(=日向)という気候地名がみられます。

図2の白川町の南部では「赤川」がほぼ東西に流れているところにある開けた谷の「赤河」地区の南向斜面にも日向という地名がみられます。

また、同町最南部で柿反と鱒淵川とが合流して「黒川」となり、ほぼ東西に流れる黒川地区の開けた谷では南向斜面に日向下という地名が見られます。

そして、興味深いのは図1の越原地区の場合、そ

のやや下流の南側に山地の下部斜面から河岸段丘にかけて陰地(=日陰)という対の地名がみられることです。普通は谷が東西方向であっても、南北(左岸・右岸)に対称の斜面や河岸段丘が発達するとは限りません。一方の側が水流の攻撃斜面となり浸食により急斜面が形成されると、農地や居住地とはなりにくく、反対側の緩やかな斜面や段丘面がたまたま北向斜面であっても、それを農耕地や居住地として選択せざるを得なくなります。その結果、その側にのみ気候地名が付けられることとなります。

この場合は北側と南側にややずれて形成された緩やかな斜面や段丘面が両方とも農地や居住地として利用され、川を挟んで対として名付けられたようです。

日向と陰地が対で存在する場合は、日向の方が戸数や古い家(本家)の割合が多く、陰地では逆に戸数は少なく、新しい家(分家)の割合が多いと考えられますが、この場合は戸数は陰地の方が多いそうです。なぜなら陰地の方が農地・居住地が広いためのようです。

また、図2の白川町南部の「赤河」地区の反対側の北向斜面には「小倉」という地名がみられ、日向の対地名ではないかと考えられます。なぜなら「小倉」の「倉」は暗いの意味もあるとされるからです。

このように日向という気候地名は岐阜県の山間地域ではよく見られます。

皆さんも、身近な地域でいろいろな気候地名や地形に関する地名などをさがしてみたらどうでしょうか。

図1 2.5万分の1地形図「小和知」「神土」の接合図
(昭和57年 国土地理院発行90%に縮小)

図2 2.5万分の1地形図「切井」
(昭和55年 国土地理院発行90%に縮小)

「世界分布図センター」には、13万点を超える分布図・地図、地図関係図書があります。

また、「情報工房」ではコンピュータ及びGISソフトを使ってオリジナル地図や分布図を作成し、印刷することができます。

調査・研究や学習、国内外の旅行の準備等お気軽にご利用ください。

岐阜県図書館

世界分布図センター・情報工房

〒500-8368 岐阜市宇佐4-2-1

TEL (058) 275-5111 (内線286)

FAX (058) 275-5115

URL <http://www.library.pref.gifu.jp/map/>

E-mail mapstaff@library.pref.gifu.jp